

二〇一五年四月一九日(参加者二名)

高欄に高鳴る瀬音夏近し	菜々
筆洗池の面染む新樹陰	菜々
夏近し山湖は碧き水湛へ	菜々
山つつじ映して山湖藍深む	菜々
春惜しむ百花百草めぐる園	菜々
若楓さざめく影や石畳	菜々
風光る山湖を駈けるさざ波に	満天
掛軸の達筆読めず春憂ふ	満天
うぐひすの声が誘ふ深山道	満天
穀雨得て園の百花の目覚めけり	満天
さざなみのごとくに風の若楓	小袖
奥池へ辿る山路の風さやか	小袖
岨の道猪垣の扉の押せば開く	小袖
小さき錠鎖されし茶室青葉闇	小袖
急磴に腰を伸ばせば山笑ふ	ほんこ
飛簷へと風に高舞ふ落花かな	ほんこ
つくばひに良き影落とす若楓	ほんこ
右左つつじを愛でる岨の道	ほんこ

石楠花の山へと続く茶庭かな	わかば
うぐひすのしきり山湖に舒して	わかば
木隠れに淡き彩さす山躑躅	わかば
若葉愛で立ち去りがたき茶庭かな	宏虎
繚乱の百花に園の春惜しむ	宏虎
水草生ふ鯉悠々と影連れて	宏虎
池鏡白く映ゆるは新樹影	こすもす
石畳隈なく埋む桜しべ	こすもす
杉美林樹間に透ける山つつじ	こすもす
若楓山湖に影の揺れやまず	有香
桜蕊積む蘭亭の飛簷かな	よう子

定例会の選

二〇一五年四月一九日(参加者二名)